

# 黒田官兵衛と、ライバルたち

## 戦国の世の「理」と「情」

福岡藩の領主となる前、黒田氏が治めた豊前国6郡。豊臣秀吉の九州平定への貢献でこの地を与えられた

黒田官兵衛・長政父子でしたが、前領主・宇都宮鎮房から激しい抵抗を受け、苦渋の決断を下します。

一方、久留米の毛利秀包や柳川の立花宗茂とは、戦いの中にも互いの立場を超えた情の交流がありました。今回は、黒田氏をめぐる北部九州の強力なライバルたちを紹介します。

### 毛利秀包

「毛利秀包肖像」  
山口市・玄濟寺蔵



### 立花宗茂

「立花宗茂肖像」  
柳川市・立花家史料館蔵



### 黒田官兵衛

「黒田如水像」  
福岡市・崇福寺蔵



※黒田官兵衛は、後に如水と名乗りますが、本誌では官兵衛に統一しています。

### 宇都宮鎮房

「宇都宮鎮房肖像」  
築上町・天徳寺蔵



歴戦に勝利してきた黒田氏に立ちほだかった宇都宮氏

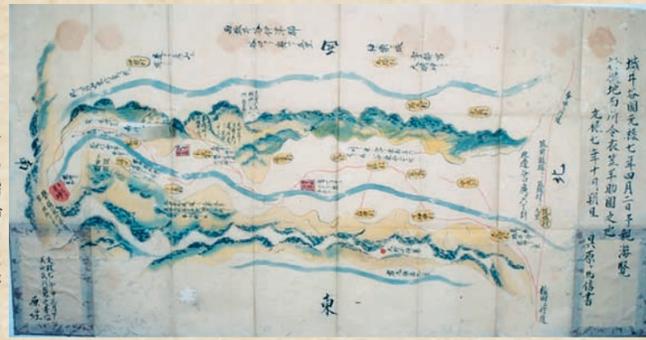
秀吉の九州平定において戦功を挙げた黒田官兵衛・長政らは、天正15（1587）年、豊前国6郡

（現在の豊前市・行橋市・築上郡など）を与えられて九州に入ります。新たに黒田氏の領地となった豊前国ですが、国内各地で一揆が起きるなど政情は不安定でした。そうした中、肥後国（熊本県）で大

### 没後も領民から慕われた宇都宮氏

黒田氏に滅ぼされた宇都宮氏ですが、領民の心にその恩義は深く根付いていました。事件からおよそ80年たった寛文10（1670）年、戦国の世も終わり、平和に暮らしていた領民たちのもとに、驚くべき情報もたらされます。かつての主君の孫が浪々の身で肥後国に生存しているとわかったのです。

領民たちはそろって「御家再興運動」を展開します。菩提寺の住職が肥後に赴いて、その者を城井谷へ迎ええました。江戸での任官を目指し、領民ごぞって資金を集めた甲斐もあって、その息子の代には越前藩に召抱えられることになりました。宇都宮氏ゆかりの領地へは戻れなかったものの、領民たちは亡き殿への恩返しを果たせたと安堵したのではないのでしょうか。



「城井谷絵図」  
宇都宮氏が没して100年後に、ときの福岡藩主・長重が儒学者・貝原益軒に命じて描かせたもの。城井谷の城址や屋敷跡、合戦地などが詳しく描かれている。築上町蔵



「宇都宮氏館跡」  
宇都宮氏が代々居住した館跡。小高い丘になっており、発掘調査の結果、貴重な遺物も多数発見されている

規模な一揆が起きます。その制圧に出陣した官兵衛の隙を突いて反乱を起こしたのが、黒田氏入国前の領主で、秀吉から伊予国（愛媛県）への国替えを命じられた宇都宮鎮房でした。鎮房は「先祖伝来の地をむざむざと渡せない」と、家臣とともにかつて居城があった城井谷を奪還します。

これは黒田氏の所領において最も激しい反乱となり、周囲の武将たちの一斉蜂起も誘発しかねない勢いでした。官兵衛の留守を預かる長政もこの黒田氏存亡の危機に、家臣に檄を飛ばします。「この一揆に負けるならば、父が粉骨を以て拝領した国を治められず、家の面目を失うものである。自分も家臣も、身の浮沈はただこの一戦にあるのだ」（『新訂黒田家譜』より訳）

長政は官兵衛の制止を振り切って城井谷を攻めますが、一度は大敗します。400年にわたってこの地を治めてきた宇都宮氏の地の利もあり、黒田軍は翻弄されます。

天正16（1588）年、いったん和議はなったものの、なお鎮房の野心に疑念を持ち、秀吉からも「鎮房を滅ぼせ」と厳命された官

兵衛父子は、苦渋の決断を下します。長政のもとを訪れた鎮房を酒宴の席で斬殺し、さらに軍勢を城井谷に派遣して鎮房の父や息子を死に至らしめました。

それまでの数々の城攻めにおいて、情理を尽くして説得し、開城させることが多かった官兵衛にとって、この難敵・宇都宮氏との戦いの結果は、生涯悔いの残る出来事だったかもしれませぬ。

### 義兄弟の契りを結び互いに勇名をはせた筑後の2領主

久留米を居城としていた毛利秀包、そして隣の柳川を居城としていた立花宗茂の二人は、義兄弟の契りを結ぶ仲でした。秀吉の九州平定の際、官兵衛は二人とともに島津軍と戦っており、いわば友軍の同志でした。

秀包は、中国地方を制した毛利元就の九男であり、妻とともに熱心なキリシタンでした。同じくキリシタンだった官兵衛とも相通ずるところがあったことでしょう。

文禄・慶長の役でも秀包は官兵衛とともに戦い戦功を挙げますが、その後の関ヶ原の戦いでは黒



築上町天徳寺にある、宇都宮鎮房をはじめ一族が眠る墓所。中央の大ぶりの墓が鎮房、その左右に父長甫や嫡男朝房の墓も見える



# 福岡藩ゆかりの地

北九州編

## 城井ノ上城址

400年以上にわたって宇都宮氏が支配してきた城井谷(築上町)。支城の一つである城井ノ上城(築上町寒田)は周囲を巨岩に囲まれた天然の要塞で、三丁の弓だけで守れるといわれたほどでした。この難攻不落の要塞を黒田軍も攻めあぐねたと伝わっています。

④ 築上町寒田  
⑤ 築上町商工観光課  
☎ 0930-52-0001(支所)



## 小倉城跡

九州平定後に秀吉が小倉城に立ち寄った後、豊前六郡を官兵衛に与えたとの知行宛行状(領地を与える証文)を出しました。また、関ヶ原の戦いの際、西軍の石田三成側に属した小倉城主・毛利勝信を官兵衛が攻め、落城させたといわれています。現在の小倉城は昭和34年に再建されたもので、天守閣は「唐造りの天守」と呼ばれ、4階と

5階の間に屋根のひさしがなく、5階が4階よりも大きくなっているのが特徴です。また、城の石垣は切石を使わない豪快な「野面積み」となっています。

## 小倉城

④ 北九州市小倉北区城内2-1 ☎ 093-561-1210  
⑤ 9:00~18:00(入場は30分前まで(11月~3月は~17:00))  
⑥ 年中無休 ⑦ 一般350円、中高生200円、小学生100円

## 水田天満宮

関ヶ原の戦いの後、柳川の立花宗茂と佐賀の鍋島直茂が激突する八院の合戦(大川市)が起こりました。このとき、加藤清正とともに鍋島軍に加勢した官兵衛は坂東寺に陣を張ったといわれます。その後、この合戦を終結させるために、加藤清正と官兵衛が水田口(筑後市)の水田天満宮で会見し、立花宗茂を説得して柳川城を開城させました。水田天満宮内の末社「恋木神社」は、日本で唯一、「恋命」を祭神としており、現在縁結びの神社として人気のスポットとなっています。

## 水田天満宮

④ 筑後市水田62-1  
☎ 0942-53-8625



## 求菩提資料館

中津城の城主であった官兵衛とその従者が求菩提山(豊前市)を訪れ、桜狩(桜の花見)を楽しんだときに詠んだ歌が残されています。現在春の風物詩として日本各地で行われる「桜の花見」は、秀吉が広めたものとされており、九州で初めて花見を行ったのは秀吉の側近であった官兵衛ではないかという説があります。

資料館のある求菩提山は、5~6世紀にさかのぼる山岳宗教「修験道」の九州における拠点であり、それらに関する資料も豊富です。

## 求菩提資料館

④ 豊前市鳥井畑247 ☎ 0979-88-3203  
⑤ 9:30~16:30(入館は16:00まで)  
⑥ 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始  
⑦ 無料



提供: 求菩提資料館

## 北九州市立いのちのたび博物館 自然史・歴史博物館

官兵衛・長政の書状や秀吉からの知行宛行状、黒田二十四騎の久野重勝、井上之房の甲冑などが展示されています。官兵衛、黒田家に関する貴重な史料が見学できる施設です。



## 北九州市立いのちのたび博物館

④ 北九州市八幡東区東田2-4-1 ☎ 093-681-1011  
⑤ 9:00~17:00(入館は16:30まで)  
⑥ 年末年始(12/29~1/1)、毎年6月下旬頃一週間  
⑦ 一般500円、高校生以上の学生300円、小・中学生200円

筑後編

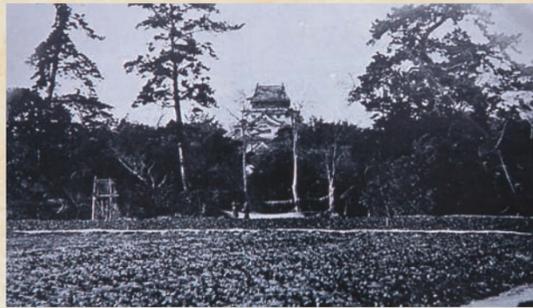
## 柳川藩主立花邸 御花



立花家と黒田家は婚姻関係でも結ばれています。宗茂の孫娘が福岡藩四代藩主綱政に嫁ぎ、五代藩主宣政を産んでいますし、福岡藩六代藩主継高の娘も、柳川藩七代藩主鑑通の正室として嫁いでいます。立花家の別邸であった建物や庭園は、現在一般公開されています。旧藩主の暮らしをしのばせる数々の収蔵品も見事で、冬は日本庭園「松清園」に野鴨も飛来し、柳川の冬を彩る風物詩となっています。

## 柳川藩主立花邸 御花

④ 柳川市新外町1 ☎ 0944-73-2189 ⑤ 9:00~18:00  
⑥ 一般500円、高校生300円、小・中学生200円  
※松清園、立花家史料館、西洋館、大広間などの見学が可能です



明治3年に撮影されたという「柳川城古写真」柳川古文書館蔵



毛利氏の後、田中氏、有馬氏が治めた久留米城は、現在本丸跡や石垣が残っている

田氏と敵対関係になります。さらに合戦中、国もとの久留米城が黒田軍と鍋島軍に包囲される事態に。しかし秀包は事前にこう言い置いていたといえます。「黒田如水(官兵衛)がわが城に来るなら、悪いようにはしないだろうから、一戦に及ばず城を明け渡し、妻子を如水に任せよ」と。結局、城は明け渡され、妻子は黒田方に無事保護されます。

合戦から戻った秀包は、毛利家の計らいで長州(山口県)に所領を与えられますが、病により32歳の若さで没しました。官兵衛は預かっていた秀包の妻子を長州に送り届け、その後秀包の娘を黒田家家老に嫁がせるなどの配慮もしています。

立花宗茂も、九州平定で島津軍を苦しめ、弱冠19歳ながら秀吉に「忠義も武勇も九州随一、九州の逸物」と賞された人物でした。また文禄・慶長の役では、窮地に陥った加藤清正軍を少人数による奇襲で救出し、清正から「日本一の武将」と賞賛されています。

関ヶ原の戦いでは石田三成率いる西軍に与したため敗将となり、柳川に戻って官兵衛や鍋島直茂、加藤清正らを迎え撃つことになりました。立花宗茂という人物は、家臣から慕われただけでなく、敵方からも「死なせるのは惜しい」と評された傑物でした。官兵衛も熱心に降伏をすすめ、開城へと導きました。

宗茂は本来なら死罪となるところを領地没収だけで済み、家臣とともにしばらく浪々の時代を送ります。その後、彼の才を惜しんだ徳川二代将軍・秀忠に御傍衆として迎え入れられ、さらには旧領地であった柳川藩に戻ることも許されました。当時としては異例の取り扱いであり、伊達政宗らとともに徳川家顧問の立場となって、76歳の長寿を全うしています。

## 官兵衛と同じく、茶道や連歌にも深い教養を備えた宗茂

武勇の士として名をはせた立花宗茂ですが、その一方で文人としても高名でした。とくに連歌に造詣が深く、家臣らとしてしばしば会を催した記録が残っています。

また、茶人としての側面もあり、晩年には徳川秀忠や家光とも茶会に同席しています。千利休の高弟だった細川忠興もその見識を高く評価し、宮中から茶事に招かれることもあったといわれています。

こうした連歌や茶の湯に対する文人としての優れた感性は、官兵衛にも共通するもので、二人が同席したならば、きっと話も弾んだことでしょう。

立花宗茂が着用した甲冑【鉄鍬革包月輪文最上胴具足】立花家史料館蔵

